

## 滑稽と私

松浦敬親

季語「春の日」は、『日本大歳時記』（講談社）や『新日本大歳時記』では時候に分類されているが、『角川大歳時記』（角川書店）では天文に分類されている。春の一日と解釈すれば時候になり、春の太陽と解釈すれば天文になるからだ。山崎宗鑑に、この二重性を利用した句がある。

### ①まん丸にいでも長き春日かな

春日（春の太陽）はまん丸に出ても、春は日永だから、春日

（春の一日）は長いなあ、という句意だ。＜まん丸に出れど永き春日かな＞という形もあるが、内容は同じ。宗鑑は室町時代の後期に活躍した連歌師で、俳諧の祖とされている。

### ②湯に入りて春の日余りありにけり

高浜虚子の句だ。

①と同じく季語「日永」（時候）を踏まえて、春の日（春の一日）を表現している。

①が言葉による謎々遊びで笑いを誘うのに対して、②は「余り」という主観の心理的なおかしみによって笑いを誘う。

①は謎が解けるとそれまでだが、②には日永や遅日（時候）を含む余情が漂う。

### ③病者の手窓より出て春日受く

西東三鬼の句で、こちらの春日は、明らかに太陽だ。病者だけに、そこに希望の光を

---

感じているのである。病気の度合いにもよるが、ちょっと頬笑ましい光景だ。

☆☆☆☆☆☆

このように、季語「春の日」は、使いかたによって時候にも天文にもなる。なのに、どの歳時記もどちらか一方にまとめて、句も両方を入れている。

その間違いを見つけると笑えるが、句がかわいそうだ。時候の場合は「春の日」に、天文の場合は「春の陽」にするなど、対策を考えるべきである。

ところで、この三句の中で一番滑稽なのはどの句だろう？『広辞苑』で「滑稽」を引くと、「滑」は乱、「稽」は同の意で、知力に富み弁舌爽やかな人が、巧みに是非を混同して説くこと、とある。今風に言えば、乱は変容で、稽は統合だが、稽には是非の混同があるから、少し違う。この三句の中で一番それがあるのは①で、①が一番滑稽だ。

しかし、②と③は俳句でも、①は違うと感じる人が多い。①が俳諧の祖で、共通の祖先であることは認めても、その後の進化で猿と人ほど違って来たと言いたいのだろう。確かにそういう側面もあるが、この先どちらが生き残るかは、定かではない、生物学的に言えば、猿の方が人よりも精子に活力があるからだ。そう言えば、滑稽句の作者には男が多いし、まだ進化の余地があるようだ。

最後に知恵の象徴である「ミネルヴァの鼻」に敬意を表して、一句を捧げる。

木菟の親でもあるか筑波山

敬親